九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 初盛唐期に於ける士人の別荘生活と「仕隠」 の風潮について

胡, 山林
九州大学大学院研究生

https://doi.org/10.15017/9651

出版情報：中国文学論集. 26, pp.1-18, 1997-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

# 初盛唐期に於ける士人の別荘生活と「仕隠」の風潮について

胡　山林

## はじめに

仕官と隠逸とは古代中国に於ける士人の二つの基本的な行動方式である。「士」という文字の基本義は出仕し官吏になるということである。古代中国の官僚機構の中で、士人はいつも重要な地位を占め、各時代の政治統治の主要な部分を荷ってきた。士人が官吏になるということは、自ら社会的責任を取ること、即ち現実を認めてそれを受け入れるということを意味した。これとは逆に、士人が官吏を辞めて隠逸すれば、それは即ち、自ら社会的責任を荷うことを拒絶することを意味した。更に言えば、それは現実を否定し排斥することであり、現実からの離脱にほかならない。隠逸と仕官とは性質が全く異なる、互いに相対立する生き方なのである。士人は隠逸と仕官のいずれか一つを選択しなければならず、両方を同時に選ぶことは不可能であった。しかし、初・盛唐期になると、一部の士人は仕官生活を送りながら、そこに隠逸的な行動様式を取り入れて、両者の融合をはかった。こうしてしだいに仕官と隠逸との明確な区別はなくなり、両者を兼ねる「仕隠」の気風が流行するようになる。[1] この際特に注目に値するのは、「別業」（別荘）を購入したり建造したりすることが「仕隠」の気風の一つの顕著な特徴だと考えられる点である。小論は士人の別荘生活を分析することを通して、初・盛唐期に於ける「仕隠」風気生成の原因とその特徴を探究し、更に「仕隠」風気と士人の行動方式の変化との関係を分析しようとしたものである。

## 一

唐代に於いて士人が別荘を買うことは、概ね初唐、盛唐期（以下唐代前期と言う）の高宗、武則天朝頃から始まる。高宗と武則天朝に仕えた宰相狄仁傑は最初河陽に自分の別荘を持った（『舊唐書』狄仁傑伝巻８９）。名臣韋嗣立の輞川別荘も当時名高いものであった（『新唐書』韋嗣立伝巻１１６）。また、多くの文人も別荘を購入している。例えば、宋之問の藍田山荘と陸渾山別荘、祖詠の汝墳別荘、張子容の鹿門山別荘、孟浩然の澗南園別荘、岑参の杜陵と終南山別荘、綦毋潜の江東別荘、王維の藍田輞川別荘、王縉の輞川別荘、薛據の南山別荘、裴廸の輞川別荘、崔興宗の輞川別荘、高適の淇上別荘、張諲の濠州別荘、沈千運の汝墳別荘、皇甫冉の陽羨山別荘、劉長卿の灞陵別荘と碧澗別荘、李頎の東川別荘等を史書に徴することができる。[2] 別荘を持つ士人の数は多く、『全唐詩』だけでも別荘を買った士人三十人以上が明記されている。当時、士人が持つ別荘は少なくとも一カ処、多い場合は二カ処あり、岑参などは合計七カ処の別荘を買い、この内の四つは終南山の別荘で、一番多くの別荘を持つ詩人だといわれる。これらから、その当時、士人の間で、別荘を買う風気が流行していたと思われる。「業」の基本的な意味は「財産」「産業」ということであり、「別業」といえば本宅以外の財産と産業を指す。住宅が個人の「主」な財産なので、本宅と官舎以外の住宅や財産を唐代前期には常に「別業」（別荘）と呼んでいた。他に、「山荘」「荘」「草堂」「別墅」「荘園」等の言葉も使われたが、最もよく使われた言葉は「別業」であったと考えられる。

士人の別荘は、その規模や大きさにより、二種類に分けられる。一つは住宅、土地、園林を含む大きな規模の別荘である。この種類の別荘には、広い土地があり、労働者を雇用して産業を経営し、農業や林業の収入もあるため、士人は経済上の自足ができる。また、士人は山水と園林に遊歴し、自然の美しい風景を鑑賞することもできる。このような別荘を「荘園性別荘」と言うことができよう。もう一種類の別荘は規模が小さく、極く少量の土地しかない、住宅も素朴な、ただ住むためだけのものであった。このような別荘を「寓居性別荘」と呼ぶこととする。いわゆる「草堂」と呼ばれる別荘がその最も代表的なものである。「荘園性別荘」は王公貴族や高級官僚だけがこれを

買う能力を持ち、普通の士人は「寓居性別荘」を買えるのみであったと考えられる。

唐代の経済で一つ注目される特徴は「荘園経済」の存在であり、「荘園性別荘」は「荘園経済」の具体的な反映であると考えられる。例えば、高宗期の高官王方翼に関しては、「鳳泉別業に居り」、「田を辟くこと数十頃、館宇を修飾し、樹木を列植す」（『舊唐書』王方翼伝巻185）とあるので、彼の別荘はもちろん「荘園性別荘」であった。玄宗期の李憕は、「伊川は膏腴、水陸は上田、修竹は茂樹し、城より闕口に及ぶまで、別業相い望む、吏部侍郎李彭年と、皆地癖有り」（『舊唐書』李憕伝巻187）といわれ、権貴の要人が土地を購入し盛んに別荘を建てた当時の風気を知ることができる。宋之問は唐代前期に新しく興った貴族であり、武則天朝に重用され、萬歳通天元年（696）前後の六、七年の間に、洛州参軍の職に就き、陸渾山荘を買っている。陸渾県（今河南省の陸渾県）は河南道洛州に在り（開元元年に洛州を河南府に改めた）、府の所在地洛州（今の洛陽市）の西南百三十里に位置する。「山荘」というからには、豪華な「荘園性別荘」であったに違いない。宋之問には他に輞川別墅があったが、『新唐書』「王維伝」には「地奇勝」と記されており、これも「荘園性別荘」であったと思われる。

唐代前期に「荘園性別荘」を持った文人の代表といえば王維である。王維が買い取った宋之問の輞川別墅は、大荘園の名に恥じぬものであった。別荘は藍田県口に在り、「輞口荘」「竹洲花塢」とも呼ばれ、その美しい風景で人々によく知られている。王維の『輞川集』の序[3]には「余が別業は輞川山谷に在り。其の遊止するところ孟城坳、華子岡、文杏館、斤竹嶺、鹿柴、木蘭柴、茱萸沜、宮槐陌、臨湖亭、南垞、欹湖、柳浪、欒家瀬、金屑泉、白石灘、北垞、竹里館、辛夷塢、漆園、椒園等有り」と述べられている。その他、畑や果園、竹林もあり、農業の労働者も雇い入れていた。「偶然作」（『箋注』巻5）六首其の二には

田舎有老翁、垂白衡門里。有時農事閑、斗酒呼隣里。喧聒茅檐下、或坐或復起。短褐不為薄、園葵固足美。動則長子孫、不曾向城市。

田舎に老翁有り、衡門の里に垂白す。時に農事の閑有れば、斗酒もて隣里を呼ぶ。喧聒たり茅檐の下、或いは坐し或いは復た起く。短褐も薄しと為さず、園葵固より美とするに足れり。動もすれば則ち子孫長じ、曾て城市に向はず。

と言う。豪華な「荘園性別荘」と言うべきであろう。これとは逆に、普通の士人の別荘は規模が小さいだけではな

く、「先生　南郭に近く、茅屋　東川に望む」（岑参「尋県南李処士別業」、『全唐詩』巻198。以下『全唐詩』の作品は巻数だけを記す）というように、素朴な草堂であったと考えられる。岑参の終南山の諸別荘はすべて「寓居性別荘」（草堂）であった。

唐代前期の士人の別荘は、「荘園性別荘」か「寓居性別荘」かに関わらず、一般的に言えば、大部分は土地の売買の結果得られたものであった。（一部の権貴の土地は皇帝の封地である。）つまり、土地の売買が認められていたことが、士人が多くの別荘を持つに至る前提条件であったと考えられる。ある程度土地の売買の自由が認められていたことは唐代経済の特徴であった。[4] 南北朝期には士族が別荘を構える現象が既に始まっていた。謝靈運はその代表例であり、彼の東山始寧別荘は規模が大きく、もちろん「荘園性別荘」であったと考えられる。[5] しかし、六朝士族の別荘は自分で購入したものではなく、何世代も維持されてきた世襲の封地であった。従って、南北朝期の士人が別荘を建てることは決して多くはなかったと考えられる。唐代では、土地の所有権はやはり国家に在ったが、ある程度の土地の自由売買はできたので（使用権の売買）、士人は土地や別荘を買うことができたのである。当時、土地の値段は恐らくあまり高くはなく、官職が高くない士人であっても買うことができたと考えられる。また、ある程度の土地の自由売買と荘園経済の発展は唐代経済の特徴であり続けたから、中唐や晩唐に至っても、別荘を購入する現象は依然として存在し、晩唐の士人陸亀蒙は二、三カ処の別荘を有していたし、司空図の王官谷別荘も大規模な別荘であった。[6]

士人が別荘を買う現象は唐代における荘園経済と土地の自由売買とに関係するが、多数の士人にとって、別荘の価値はその経済的側面にのみあったわけではなく、別荘での閑雅な暮らしを享受することにもあったのである。自分の別荘さえあれば、仕官しながら別荘での閑適な暮らしを享受できる。つまり、別荘を買うことと唐代前期の士人に見られる「仕隠」の風気とは密接な関係を持つのである。

## 二

唐代前期に士人が別荘を構えた場所は、これをほぼ三種に分類することができる。即ち、山中の別荘、家郷近くの別荘及び赴任地近くの別荘の三種である。

第一種の山中の別荘とは都市から遠く離れた山の奥に建てられたものである。唐代前期には士人達は科挙の受験のために刻苦して読書する必要があり、そのため別荘は格好の勉強場所とみなされるようになった。静かな環境が保証される山中の別荘は打ってつけの場所として士人に好まれた。例えば、詩人の張諲は松山別荘で十年間隠居し讀書してから、仕官している。一方、一生隠逸するような場合、または官吏を辞めて隠居するような場合に、山中の別荘を以て隠居の場所と定める士人もいた。例えば、儲光羲の「題崔山人別業」詩（巻１３７）の中の崔山人は「南陽に隠居する者、室を築く丹渓の源」といい、孟浩然の「冬至後過張呉二子檀渓別業」詩（巻１６０）中の呉・張の二人は「外事　情　都て遠く、中流　性　便ずる所」と詠じているが、この三人はすべて山中別荘に隠居した士人である。彼らは先秦時代の巣父・伯夷のように自分の名声を保つために、また漢代の周黨のように社会の混乱から逃げるために隠逸したわけではない。彼らは個人の精神の自由のために、都会や朝廷から逃れて山林に隠居したのである。そのためには、山中の別荘は格別良い場所であったと考えられる[7]。

山中で別荘を買うほか、自分の家郷近くに別荘を建てたり購入したりする士人も多くいた。丘為・孟浩然・綦毋潛・李頎等は故郷の近くに別荘を持っていた。また、祖詠は洛陽の出身で、開元十二年に進士になり、仕官したが、終始意を得ず、斉州で官に任じた折、官位が低い上に、更に貶謫に遇い、終に失意して家郷に帰り、隠逸の暮らしをするようになった。この際注意しておきたいのは「家を移し汝墳の間の別業に帰り、漁樵を以て自ら終ふ」と言っているように（『唐才子伝』巻１「祖詠伝」）、彼は汝墳の「別荘」で晩年の隠居生活を送っていることである。また、李頎の東川別荘、孟浩然の淵南園別荘、綦毋潛の江東別荘等も家郷近くに持たれた別荘である。士人の家郷近くの別荘は大体、科挙受験や出仕以前に購入されたもので、士人はそこに比較的長く住んだのであった。この場

合、別荘の用途には二つあり、一つは科挙の受験準備のために隠居して読書する場所である。二つ目の用途は、退官後に隠居するための場所であり、士人達は晩年隠逸する際には、家郷近くの別荘へ退隠したのである。

任地近くの場所に設けられた士人の別荘も多くあった。宋之問・儲光羲・王維・裴迪・薛據・崔興宗・閻防・岑参・王縉・高適等の士人は、その任官地付近に皆自分の別荘を持っていたのである。都長安でも任についた士人は長安付近に別荘を構えた。終南山は地理的位置や自然環境がふさわしかったので、長安で務める士人の別荘はここに集中し、別荘を持つ士人は記載があるものだけでも数十人に達した。例えば、岑参・閻防・儲光羲・張諲等の士人が終南山に別荘を買っている。岑参は長安付近に五カ処の別荘を持った。『唐才子伝』巻三の「岑参伝」には、「別業は杜陵山中に在り」という。この他、岑参はまた終南山高冠谷口別荘（「高冠谷口召鄭樗」詩、巻２００）、終南白閣西草堂別荘（「因假帰白閣草堂」巻１９８）、終南雙峰草堂別荘（「終南雙峰草堂作」同前）、終南太一石鼇崖口潭別荘（「太一石鼇崖口潭舊廬招王学士」同前）など、終南山に四カ処の別荘を持っていた。岑参は青年時代にも嘗て少室山に隠居して読書し、その折には、少室山（「南渓別業」詩を参照）と陸渾県（「巴南舟中思陸渾別業」詩を参照）の二カ処に別荘を購入してもいるのである。

長安付近の別荘は科挙の準備のために購入されたものであって、例えば、岑参の杜陵別荘や高冠口別荘は正しくそうしたものであったと思われる。然し、長安付近や任官地付近の別荘は、主に休暇の際の休息地や遊びの場所として買われたものである。この種の別荘は任官地から遠くはなく、公務の場と別荘の間の交通は便利で、休暇時には町を離れて自分の別荘へ行き、休暇が終わると公務の場に帰って、官吏としての政務を執ったのであった。この種類の別荘は閑適な暮らしを享受するために買うものなので、一旦仕官の勤務地が変われば、士人は新しい勤務地で新しい別荘を買う。任地が決まればそこでまた新たに別荘を買うのである。従って、一人の士人が生涯で数カ処の別荘を買っていたとしてもおかしくはない。以上の、山中の別荘、家郷付近の別荘、勤務地の別荘の三者の中で、唐代前期に見られる士人の「仕隠」の気風と最も関係が深いのは勤務地付近の別荘であり、以下の小論もこれに重点を置くことになる。

## 三

唐代前期に士人が別荘を買う時には周囲の自然環境を重視し、それを選ぶに際しては明確な選択規準があったと考えられる。彼らはつねに自然が美しく、都会の騒音が無いところを選んでいる。特に勤務地付近の別荘は、「荘園性別荘」よりも更に自然美を重視した。それらの別荘は都市に近くはあったけれども、都市内の士人の官舎とはまるで違い、却って隠士の住む環境と似ていたのである。これは唐代前期の別荘の特徴であると考えられる。具体的にいえば、士人の別荘は時に青山と相対し、時に青山を背にしていた。

白首此為漁、青山対結廬。　白首　此に漁を為し、青山　結廬に対す。　（劉長卿「過鸚鵡洲王處士別業」、巻148）

直與南山対、非關選地偏。　直に南山と対するは、地偏を選ぶに関するに非ず。　（孟浩然「冬至後過呉張二子檀溪別業」、巻160）

依依西山下、別業桑林邊。　依依たり西山の下、別業　桑林の邊。　（高適「淇上別業」、巻214）

山は、静かで美しく、都市の騒音を忘れさせてくれるのみならず、別荘と都市とを隔てる最良の自然の「屏風」であり、塵世と一線を画した別世界を現出してくれるものであった。また別荘に不可欠なものとして水の流れがある。

驟雨鳴淅瀝、颼颼溪谷寒。　驟雨　鳴ること淅瀝、颼颼として溪谷寒し。　（岑参「太一石鼈崖口潭舊廬招王学士」、巻198）

碧潭千餘尺、下見蛟龍蟠。　碧潭　千餘尺、下に蛟龍の蟠るを見る。

寒山轉蒼翠、秋水日潺湲。　寒山轉た蒼翠、秋水　日に潺湲たり。　（王維「輞川閑居贈裴秀才迪」、『箋注』巻7）

野橋経雨断、澗水向田分。　野橋　雨を経て断たれ、澗水　田に向ひて分かる。　（劉長卿「碧澗別墅喜皇甫侍御相訪」、巻147）

渓流や深谷の澗水、或いは山間の瀑布、こうした水の流れは絵画の如く、明澄で清らかな音楽をかなで、別荘のかなたには青山が横たわり、近くには青草や鮮花が木々の緑に照り映えていた。

花明潘子県、柳暗陶公門。　花は明かなり潘子の県、柳は暗し陶公の門。　（岑参「春尋河陽陶處士別業」、巻200）

松蘿深舊閣、橋木散閑田。　松蘿　舊閣に深く、橋木　閑田に散たり。

（劉長卿「和中丞出使恩命過終南別業」、巻１５１）

山と川が遠景となり、花草と緑木が近景となって、別荘はあたかも山水画の中に置かれているようであった。別荘を取り囲む風景は多様な変化を見せ、一年中いつでも自然の魅力にあふれていたのである。

石門呑衆流、絶崖呀層巒。　石門　衆流を呑み、絶崖　層巒に呀たり。

幽趣倏萬変、奇觀非一端。　幽趣　倏ち萬変、奇觀　一端に非ず。

（岑参「太一石鼈崖舊廬招王学士」、巻１９８）

屋復経冬雪、庭昏未夕陰。　屋は復た冬雪を経、庭昏く未だ夕陰ならず。

（祖詠「蘇氏別業」、巻１３１）

また、別荘の周囲は静かで人跡も稀れであった。「秋草は三径を蕪す、寒塘に独り一家」（劉長卿「過湖南羊處士別業」、巻１４７）「共に芳杜の色を憐み、終日閑居を伴す」（劉長卿「過鸚鵡洲王處士別業」、巻１４８）とうたわれるように、客人とても訪れることがない。「終年客無し常に閉關す」（王維「答張五弟」、『箋注』巻１４）。ここでは都市の喧噪と官場の闘争はあたかも別世界のことのようであった。士人は自由で静謐な別荘暮らしの愉悦を十分に享受していたのである。

士人はここでただ隠士の「環境」を選択したばかりではなく、意識的に官吏の生活方式とは違う隠士の「生活」を実現しようとしたのである。別荘の周囲には田畑があり、ここで耕すことが別荘生活の重要な要素となっていた。

不到東山向一年、帰来才及種春田。東山に到らざること一年に向とす、帰り来ること才かに春田を種うるに及べり。

（王維「輞川別業」、『箋注』巻１０）

山村帰種田、野花迎短褐。　山村　帰りて田に種うれば、野花　短褐を迎ふ。（岑参「胡象落第帰王屋別業」、巻２００）

野人種秋菜、古老開原田。　野人　秋菜を種ゑ、古老　原田を開く。

（高適「淇上別業」、巻２１４）

田地で働く外、士人達はまた釣樵を楽しみ、農夫と隣居した。「湖畔に樵唱を聞き、天邊に行雁を数ふ」（周瑀「潘司馬別業」、巻１１４）「樵路前みて嶺に傍ひ、田家遙に門に対す」（祖詠「田家即事」、巻１３１）。ある時は漁夫や農夫と交際し、或いは文人と交遊した。「文を以て長く友と會し、ただ徳もて自から隣を成せり」（祖詠「清明宴司勲劉郎中」、巻１３１）、友と連れ立っての山水の遊びと言えば、王維と裴迪が互いに唱和して作った

『輞川集』が代表的である。別荘の付近には常に寺院があり、僧侶との交際も別荘生活の一部分であった。「草堂毎に暇多く、時に山僧の門に謁す」（李頎「無盡上人東林禅居」、巻１３２）。その外、読書もまた別荘生活に欠かすことのできないものである。

青山、緑水、鮮花、茂木といったものが別荘の美しい自然を形作り、読書、農業、山水の賞玩、及び文人、僧侶との交際等が別荘の暮らしの内実となった。このような別荘の生活は仕官の暮らしとは対照的で、隠士の生活に近いものであったと考えられる。士人はしばしば自らの別荘暮らしを隠居と呼び、その生活を賛美して、「勝概紛として目に満ち、衡門　趣彌濃なり」（岑参「因假帰白閣西草堂」、巻１９８）、「此の地遺老すべし、君に勧む来たりて考槃せんことを」（岑参「太一石鼈崖舊廬招王学士」、巻１９８）、「楽しむ所は衡門の中、陶然として其の貴きを忘る」（王維「晦日遊大理韋卿城南別業四声依次用各六韻」、『箋注』巻１４）、「且く世情に遠ざかり、吾れ今聊か自然たり」（高適「淇上別業」、巻２１４）と詠んだ。彼らは普段は官舎に住んで公務に明け暮れ、休暇になると別荘へ行き、喧噪の都会と矛盾に満ちた官場から離れて、官吏の生活とは完全に異なる隠士のような生活を体験した。これこそが士人が別荘を購入する主な目的であったと考えられる。実際、士人が別荘に住むことのできる時間は限られていた。唐代の官制によれば、普通の官吏は十日に一日の休みがあったほか、短い節気假があり、こうした休暇にしか別荘にいくことはできなかったのである（『唐會要』巻８２）。「茲の晨乃ち休假し、適ま往く田家の廬」（韋応物「往雲門郊居途経回流作」、巻１９１）。もし公務の忙しい時期、また命令を受けて辺境に出掛けたり、他の地方へ出張した時などには、正常の休暇を取ることができない。つまり、長い時間別荘へ行けないことは普通の現象であった。「久しく林壑と辞し、来るに及んで松山大なり」（岑参「終南雙峰草堂作」、巻１９８）、「東山に到らざること一年に向とす、帰り来ること才かに春田を種うるに及べり。」「十日に一たび手を携へ、幅巾して寒山を望む」（李頎「裴尹東渓別業」、巻１３２）と。王維の「依遅として車馬動き、惆悵として松蘿を出づ。青山に別れ去るを忍ぶは、其れ緑水に如何」（「別輞川別業」、『箋注』巻9）、王縉の「山月暁に仍ほ在り、林風涼として絶へず。殷勤として情有るが如く、惆悵として人を別れしむ」（「別輞川別業」、巻１２９）などの詩には、別荘を懐しく思う感情が満ち溢れている。別荘での滞在時間は長くなかったが、それでも士人はやはり自

分の別荘を持とうとしたのである。士人にとって、別荘での生活は既に不可欠のものとなっており、それによって、仕官の生活を補充する必要があったのだと考えられる。別荘での生活と環境は隠士に近いものだが、士人は本当に隠逸をし、官吏を辞めるなどということはしなかった。彼らの希望は仕官しながら隠逸に近い生活を体験し、都市から遠く離れるが官職は離れず、山中の別荘を持つけれども俗世間から断絶しないという生き方であった。従って、彼らはいつも隠居と別荘の生活とを区別して、「何ぞ必ずしも桃源の里に、深居して隠倫を作さん」（祖詠「田家即事」、巻１３１）、「何ぞ必ずしも崆峒に上り、独り尭の尊ぶ所と為らんや」（儲光羲「題崔山人別業」、巻１３７）と述べている。即ち、士人の目的は別荘の生活を通して、一時的に仕官の生活とは違う快適な生活を体験することであり、真に隠居することではなかったのである。

唐代前期の士人が営んだ別荘の環境と生活は、晋代の詩人陶淵明の隠居を模倣することを明らかに意識したものであった。中国文学史上、陶淵明は最初に個人精神の自由のために、伝統的な士人の出仕至上の行動方式を放棄した詩人である。唐代前期の詩人は意識的に陶淵明の隠居環境と隠居生活を学んだ。美しい自然環境の中に別荘を構え、自由で楽しい別荘生活を送るといったことは、すべて陶淵明の作品中に表現されている。更に、「南山」「柳暗」などの唐代前期に詩人が書いた言葉は直接陶淵明の作品から取り入れられている。[8] また、ある作品では直接陶淵明その人を引き合いに出して自らの別荘生活を喩えている。「一瓢顔回の陋巷、五柳先生門を対す」（王維「田園楽七首」）、「復た接輿の酔ひに値ひ、狂歌す五柳の前」（王維「輞川閑居贈裴秀才迪」）、「花は明かなり潘子の県、柳は暗し陶公の門。」（岑参）。こうした作品から唐代前期には陶淵明の隠居生活は士人の生活の理想となり、一つの新しい生活方式を代表するものとして受けとられていたと考えられる。然し、唐代前期の士人が欲したのは、隠逸風の生活だけであり、官を離れた本当の隠居ではなかった。彼らは陶淵明風の隠居生活を好んだが、陶淵明のように退隠することは欲していない。彼らは仕官しながら同時に陶淵明風の生活をすることを希望したのであって、この点は唐代前期の士人の別荘生活と陶淵明の隠居との重要な相違点である。

## 四

以上見てきたように唐代前期には士人の別荘生活が形成されてきたが、彼らの行動方式を古代の伝統的士人と比べてみると、そこには明らかな変化が見られる。唐代の士人は朝廷や役所で勤務することを本務とし、休暇の折には別荘へ行って、自然の山水や園林に遊んだ。喧噪な俗世から遠く離れ、官場の闘争を避け、煩瑣な公務から逃れた彼らの別荘生活は、隠士の生活と同じものである。つまり、士人達は治国平天下のために功績を建てることを人生の理想として追求しながらも、一方では、別荘での生活を通して隠逸生活の自由と閑適な生活を享受した。そうすることで仕官の行動方式と隠逸式生活とを一体化し統一したのである。唐代前期に士人が別荘を購入した目的は仕官の行動方式と隠逸的な行動方式とを融合することにあり、それが所謂「仕隠」の行動様式なのである。

「仕隠」の「仕」は仕官することを指すが、「隠」は隠逸そのものではなく、隠逸をまねた生活、即ち自分の身を田園や山林の閑適な別荘生活におくことを指していると考えることができる。楽しさに満ちた、閑雅で、愉快な別荘生活は、以前は隠士のみに許された生活であったが、唐の士人はそれを仕官しながら実現しようとしたと言える。唐代前期には士人は仕官しながら別荘での生活も享受するやり方を「仕官と隠逸を兼ねる」と称し、時に「衣冠の巣許」と呼んだ。韋嗣立は驪山に別荘を構え、武后と中宗は屢々そこへ行き、陪駕した大臣達に命じて詩と文を作らせた。別荘の立派な様子を賛美して、張説の「東山記」（『全唐文』巻２２６）は次のように述べている。

兵部尚書同中書門下三品修文館大学士韋公、体含真静、思協幽曠。雖翊亮廊廟、而緬懐林薮、東山之曲、有別業焉。嵐気入野、榛煙出谷、魚潭竹岸、松齋薬畹。虹泉射電、雲木虚吟。恍惚疑夢、間関忘術。茲所謂丘壑夔龍、衣冠巣許也。

兵部尚書同中書門下三品修文館大学士韋公、体は真静を含み、思は幽曠に協ふ。廊廟を翊亮すと雖も、而も緬かに林薮を懐ひ、東山の曲に、別業有り。嵐気　野に入り、榛煙　谷より出づ。魚潭　竹岸、松齋　薬畹あり。虹泉は射電し、雲木は虚吟す。恍惚として夢かと疑ひ、間関として術を忘る。茲れ所謂丘壑の夔龍、衣冠の巣許なり。

これは名臣韋嗣立の別墅を描いたものだが、その「衣冠の巣許」という言葉は「仕隠」の概念を説明する最も典型

的な用語である。他人の詩中に「吏に非ず隠に非ず晋の尚書、一丘一壑に乗輿を降る」（劉憲「奉和聖制幸韋嗣立山荘」、巻７１）、「倶に隠路の側に臨み、同じく帝城の邊に在り。謝公　出處を兼ね、妓を携へて林泉に玩ぶ」（崔泰之「奉酬韋嗣立祭酒偶遊龍門北渓忽懐驪山別業因以言志示弟淑奉呈大僚之作」、巻９１）等の評論があり、韋嗣立を東晋の（先に隠居し後に仕官した）謝安に擬して賛美していることが分かる。王維もかつて「暮春太師左右丞相諸公於韋氏逍遙谷讌集序」（『箋注』巻１９）を撰し韋嗣立の別荘を次のように描いている。

山有姑射、人蓋方外；海有蓬瀛、地非宇下。逍遙谷天都近者、王官有之。不廃大倫、存乎小隠。迹崆峒而身拖朱紱、朝承明而暮宿青霭、故可尚也。……日在濛汜、群山夕嵐。猶有濯纓清歌、據梧高詠、与松喬為伍、是羲皇上人。

山に姑射有り、人は蓋し方外なり；海に蓬瀛有り、地は宇下に非ず。逍遙谷の天都に近きは、王官之を有てり。大倫を廃てずして、小隠を存せり。迹は崆峒にして、身には朱紱を拖き、朝には承明にして暮には青霭に宿る、故に尚ぶべきなり。……日は濛汜に在り、群山は夕嵐たり。猶ほ濯纓の清歌有り、梧に據りて高詠し、松喬と伍と為るは、是れ羲皇より上の人なり。

「迹崆峒而身拖朱紱、朝承明而暮宿青霭」という語は即ち別荘の生活が仕官と隠逸の行動方式を融合したものであることを表している。昔は、隠士だけに贈られた「羲皇上人」という誉めことばを使って、王維はここで「仕隠」のやり方を賛美しているのである。唐代の士人の隠逸観念の変化がよく分かるであろう。

このような士人の仕官と隠逸的生活の融合を肯定する考え方は、ただ韋嗣立一人を賛美するためのものではなく、士人の理想と時代風潮とを反映するものであり、仕官と隠逸の両立は当時の士人の一般的な理想であったと言える。王勃の「夏日宴張二林亭序」（『全唐文』巻１８１）に曰う。

張二官松駕乗閑、桂宴追賞。引簪裾之勝侶、狎丘壑之神交。辯縦於解頤、道深於喩指。香杯濁醴、是河朔之平生；雄筆清詞、得高陽之意気。林亭曠望、季倫調伎之園；泉石周遊、子晋登仙之浦。舟浮葉影、簟積花文。黄鵠度而驚、丹烏傾而日晩。出處之情一致、筌蹄之義両忘。

張二官は松駕もて閑に乗じ、桂宴を追賞す。簪裾の勝侶を引き、丘壑の神交に狎る。辯は解頤を縦にし、道は喩指よりも深し。香杯の濁醴、河朔の平生を是とし；雄筆の清詞、高陽の意気を得たり。林亭に曠望すれば、季倫調伎の園；泉

石に周遊すれば、子晋登仙の浦。舟は葉影に浮かび、簟は花文を積む。黄鵠度りて驚き、丹烏傾きて日晩る。出處の情致を一に、筌蹄の義両ながら忘る。

宋代の詩評家張戒の『歳寒堂詩話』（巻上）には王維の別荘生活と仕官の両立を評して「摩詰心淡泊にして、本仏を学びて画を善くす、出づれば則ち岐・薛諸王及び貴主に陪して遊び、帰れば則ち輞川の山水に饜飫す。故に其の詩は富貴と山林において、両つながら其の趣を得たり。」という。「出處之情一致、筌蹄之義両忘」「富貴山林、両得其趣」等の言葉は共にその別荘生活が仕官と隠居の方法を融合したものであったこと指していると考えられる。

唐代前期に士人達は常に「大隠」「吏隠」「真隠」「小隠」などの言葉を使っている。まず「大隠」の用例を瞥見しておく。

誰知大隠者、兄弟自攀追。誰か知る大隠の者、兄弟自ずから攀追するを。

（王縉「同王昌齢裴廸遊青龍寺曇壁上人兄院集和兄維」、巻１２９）

方知従大隠、非復在山林。方に知る大隠に従ふは、また山林にあるにあらざるを。

（儲光羲「同張侍御鼎和京兆蕭兵曹歳晩南園」、巻１３９）

次は「吏隠」の用例である。

宦遊非吏隠、心事好幽偏。宦遊　吏隠に非ず、心事　幽偏を好む。

（宋之問「藍田山荘」、巻５２）

若人兼吏隠、率性夷栄辱。若し人　吏隠を兼ぬれば、性に率ひて栄辱を夷しくす。

（李嶠「和同府李祭酒休沐田居」、巻５７）

次は「真隠」である。

明当訪真隠、揮手入無倪。明くれば当に真隠を訪ひ、手を揮りて無倪に入るべし。

（綦毋潜「宿太平観」、巻１３５）

江外有真隠、寂居歳已侵。江外に真隠有り、寂居して歳已に侵せり。

（包融「酬忠公林亭」、巻１１４）

真隠夷軌、黙仙解形。真隠は軌を夷しくし、黙仙は形を解く。

（李邕「大唐贈歙州刺史葉公神道碑」、『全唐文』巻２６４）

最後に「小隠」の用例を見ておく。

初盛唐期に於ける士人の別荘生活と「仕隠」の風潮について（胡）

不廃大倫、存乎小隠。　大倫を廃てずして、小隠を存せり。

（王維「暮春太師左右丞相諸公於韋氏逍遙谷讌集序」、『箋注』巻19）

小隠慕安石、遠遊学屈原。　小隠　安石を慕ひ、遠遊　屈原を学ぶ。

（李白「秋夜獨坐懐故山」、巻241）

「大隠」の語は王康琚の「招隠詩」に出る（『文選』巻22）。唐代前期の士人が使う「大隠」の語は、王康琚の「大隠」と同じ意味であり、朝廷や都会で隠居することを指す。「小隠」もやはり王康琚の「招隠詩」に出る語である。それは「大隠」とは逆に、仕官を辞めて隠逸する伝統的な隠居の方式を指している。王康琚は「大隠」を理想的な隠居方法と考え、「小隠」の隠居に反対したので、「大」「小」の区別をつけたのだと考えられる。「吏隠」は唐代前期の士人が初めて創出したもので、仕官しながら隠居の生活を享受することを指すのだが、具体的にはもちろん別荘での生活を指しているのである。南朝の袁淑はその『真隠伝』において「真隠」という語を初めて提出した。彼は六朝期に一部の士人が「隠士」という称号を受け取ったあとで仕官するやり方に不満を抱き、古代から当時までの有名な隠士の事跡を編集して、『真隠伝』を撰し、これらの隠士こそが「真隠」だと誉めたのであった。[9] 唐代前期の士人達も仕官を辞め山林と田園へ隠居する人を「真隠」と呼んだと考えられる。

「大隠」と「吏隠」の二つの概念は共に仕官と隠逸の両立を指し、「小隠」と「真隠」の二つの概念は官吏を辞めて隠逸することを指す。「大隠」「吏隠」の基本点は仕官することにあり、それは仕官を人生の第一の理想とするが、「小隠」「真隠」の基本点は仕官の否定にある。唐代前期の士人の目標は、隠逸ではなく「仕隠」であった。次に、「大隠」「吏隠」の二つの概念を比較すれば、士人の理想としたものは、「吏隠」ではなく「大隠」である。「吏隠」とは、仕官を否定しない点では「大隠」と同じであるが、「吏」とは元来官位の低い小吏を指す言葉である。しかし、唐の士人は朝廷に進出して高官となり、国を治め天下を安定させ、自分の才能と理想を実現することを目標としたから、「吏隠」と比べて高官の位に居りながら同時に隠逸的な別荘生活を享受する「大隠」は、唐代士人の願望により合致する理想であった。儲光羲の「同張侍御鼎和京兆蕭兵曹華歳晩南園」詩は次のように言う。

公府傳休沐、私庭效陸沈。方知従大隠、非復在幽林。闕下忠貞志、人間孝友心。既将冠蓋雅、仍與蓬蘿深。寒変中園柳、春帰上苑禽。池涵青草色、山帯白雲陰。潘岳閑居賦。鐘期流水琴。一経当自足、何用遺黄金。

公府　休沐を伝へ、私庭に陸沈を效ふ。方に知る　大隠に従ふは、復た幽林に在るに非ざるを。闕下忠貞の志、人間孝友の心。既に冠蓋の雅なるを将てし、仍ほ蓖蘿の深きに與す。寒は変ず中園の柳、春は帰す上苑の禽。池は青草の色を涵し、山は白雲の陰を帯ぶ。潘岳閑居の賦。鐘期流水の琴。一経すれば当に自足すべし、何ぞ黄金を遺るを用ひんや。

「陸沈」とは『荘子』則陽篇に出典を持つ言葉で、水無くして陸に沈むと言う表現。隠士が人間世界に隠れることを喩えたものである。儲光羲の作品は、仕官しながら別荘に閑居する「大隠」は、隠士を模倣したものであるが、山林へ退隠する隠士そのものとは違うと主張する。彼は、詩人がもし別荘の生活に「自足」することができたなら、官職を棄て隠士になる必要などないと考えていた。他の詩人もまた「朝には公卿の府に遊び、夕には山林の人」（李華「詠史詩」十一首の三、巻153）と述べる。士人達は「大隠」を賛美して、「大隠」を自分の理想とし、「大隠」の境地を追求した。仕官しながら別荘の閑適な生活を享受することは、唐代前期に士人達が「大隠」を実現する具体的な方策であったと考えられる。

## 五

唐代前期に士人が別荘を買い別荘生活を送ったことは、士人が仕官と隠士的な生活の二つの行動方式を融合して、更に理想的な生活を創造したいという願望を持っていたことを表す。晋の孫綽は山濤を批判して、「吏非吏、隠非隠」と言ったが[10]、唐代に至ると、士人は逆に、そのような「仕隠」の生活にあこがれたのである。このような「仕隠」に対する態度は、唐代前期における士人の処世観念と行動方式との変化を表すものと考えられる。

唐代前期においても、士人は別荘に身を置き、別荘周辺の美しい自然に感動したとき、やはり仕官を辞めて山林田園へ隠居しようとする情緒が芽生えることはあった。岑参は一生ずっと仕官しており、退官したことは全くないが、彼の「下外江舟懐終南舊居」詩（巻198）には次のように言う。

杉冷暁猿悲、楚客心欲絶。孤舟巴山雨、萬里陽臺月。水宿已淹時、蘆花白如雪。顔容老難頼、把鏡悲鬢髪。……巖壑帰去来、公卿是何物。

杉冷かにして暁猿悲しみ、楚客　心絶たんと欲す。孤舟巴山の雨、萬里陽臺の月。水宿已に淹時、蘆花　白きこと雪の如し。顔容老いて頽なり難く、鏡を把りて鬢髪を悲しむ。……巖壑に帰りなん、公卿是れ　何物ぞ。

他の詩人も

且向世情遠、吾今聊自然。　且く世情に遠ざかり、吾今聊か自然たり。（高適「淇上別業」、巻２１４）

別業居幽處、到来生隠心。　別業　幽處に居り、到来　隠心生ず。（祖詠「蘇氏別業」、巻１３１）

と述べる。このような退隠の願望は宴飲、賞遊などの作品に屢々現れる。詩人はその時あたかも仕官を辞め山林に隠れ、仕官への熱情を失ったかのようだ。然し、実は彼らの意識の中には真に退隠したいとの願望は存在しておらず、彼らが渇望していたのは一つの新しい行動方式なのである。彼らは、伝統的な、功績を建て国家を治める士人の人生原則に従い、出仕して官吏となり、個人の才能と理想を実現したいと考えていた。特に唐代前期の科挙制度は彼らの出仕の理想を実現するためには、有利な現実的条件であった。以前のどの時代の士人と比べても、彼らは最も多くの出仕機会を持ち、最も強烈な出仕願望を有していた。薛據の「古興」（巻２３５）詩には「丈夫は兼済を需む、豈に能く一身を楽しましめん」と言い、岑参は屢々自分は「五斗米」の微官だと言っているが、しかし終生隠逸することはなかった。だが一方で、彼らは隠士のように俗世から遠く離れ、精神的束縛を受けることなく自由で、また、山水の間に遊歴して自然の風景を鑑賞する、そうした生活に憧れていた。これは仕官の暮らしの中では全く得られないものである。この二つの根本的に対立する行動方式を同時に両立させることは不可能である。もし出仕の願望を実現すれば、必ず隠逸の行動方式は放棄しなければならない。もし隠士の自由で閑適な生活を享受するなら、必ず仕官の行動方式は放棄しなければならないのである。こうした矛盾を解決する方策として、彼らは別荘での暮らしによって仕官の行動方式を補充する方法を見つけたのである。そうすることで、仕官しながら同時に隠士の閑適な暮らしを享受できるようになったのである。

儒家の処世観を確立した孔子は、嘗て自分の理想として、自然の山水を好み、精神を束縛されない自由をあげている。[11] しかし、この話は孔子の個人的な一時の感慨であり、士人の一般的な行動方式と見做せるものではない。孔子の思想の中では、士人の人生上の原則はあくまで政治に身を入れることであり、愉快に山水に遊ぶこととは無

縁であった。この結果、自然の美しさを鑑賞する喜びは隠士に独占されて、隠逸生活の主要な要素となり、更には隠逸という言葉は山水を賞玩することと同じ概念を表す言葉になっていった。その一方で、士人は一生出仕して、社会的な様々な価値の実現を追求したが、精神的に自由な個人的空間を追求しようとはしなかったのである。唐代前期になると士人達は仕官と同時に隠逸に近い生活の楽しさを享受するようになり、士人の社会的責任だけを強調して士人の個性的存在に関心を払わなかった伝統的な処世原則の不備を補うようになった。士人の処世原則と行動方式を更に理想的で完全なものにしたわけである。こうした願望が「仕隠」の本質だったと考えられる。

唐代前期の「仕隠」の風潮は概ね中唐期まで続き、その後は、新しい「吏隠」という意識が士人達の中で生まれ、流行していくことになる。「吏隠」の「吏」は、官位が低い小吏を指し、「吏隠」意識を持つ士人達は大抵小吏か、または嘗て小吏だった下層官吏である。ここでいう「隠」とはやはり退隠及び隠逸そのものを指すのではなく、隠居と「似た」生活を指す。「吏隠」とは、身分は役人だが、政務には関心がなく、精神は俗世を超え出て、隠逸と同じ生活をする、いわゆる「居官如隠」の人をいう。一方、「仕隠」の核心は仕官にあり、隠逸にはない。士人の基本的な行動方式が仕官であり、隠逸に近い別荘生活はあくまでも仕官の行動方式の補充に過ぎなかった。この仕官に対する態度の違いこそが「吏隠」と「仕隠」の最大の相違である。「吏隠」の仕官に対する消極的な態度は「仕隠」とは完全に異なり、むしろそれは「仕隠」の否定であったと考えられる。

## 注

（1）『実賓録』（作者は不詳である）に引く『雲隠大議』に「仕隠：唐楊初為江西王仲舒従事、終日長吟、不親公牘。府公致言、拂衣而去、乃採山飲泉、朝客聞之、以為仕隠。」と。ここの「仕隠」の語は隠居のように仕官することを意味し、本文中の「仕隠」の意味とは違う。

（2）宋之問は『全唐詩』巻52。祖詠は『全唐詩』巻131。張子容は『唐才子伝』巻3の本伝。孟浩然は『全唐詩』巻159。綦毋潜については李頎の「題綦毋校書別業」（『全唐詩』巻132）を参照。薛據は『全唐詩』巻253。

王維は『輞川集』。王縉は『全唐詩』巻129。裴廸は『輞川集』（『全唐詩』巻129）を参照。崔興宗は杜甫の「九日過藍田崔氏山荘」（『全唐詩』巻324）。劉長卿は『唐才子伝』巻2本伝。張諲は郎士元の「贈張五帰濠州別業」（『全唐詩』巻249）を参照。沈千運は『唐才子伝』巻2本伝。岑参は『全唐詩』巻198－200。皇甫冉は『唐才子伝』巻2本伝。李頎は「不調帰東川別業」詩。高適は「淇上別業」詩。

（3）『王右丞集箋注』巻13。王維の詩文は、趙殿成箋注『王右丞集箋注』を底本とした（以下『箋注』と略称）。

（4）例えば、『新唐書』楊炯伝（巻201）に曰く：「乃去具茨山下、賈園数十畝」。『通典』巻2「田制」に唐代の法令を引いて「官人永業田及賜田欲売及貼賃者、皆不在禁限」と。

（5）謝靈運の始寧別墅に関しては、『宋書』謝靈運伝（巻67）及び本伝中の謝靈運が作った「山居賦」を参照。

（6）陸亀蒙の「甫里先生伝」及び『姑蘇志』『南部新書』によれば、陸亀蒙は家を蘇州城内に構え、その他、甫里と震澤の二カ処に別荘を持っていた。また茶園、土地などの財産もあった。『南部新書』辛巻に「司空図侍郎、舊隠三峰、天佑末、移居中條山王官谷、周回十餘里、泉石之美、冠於一山、北岩之上、有瀑泉流注谷中、漑良田数十頃、至今子孫猶存、為司空之荘耳。」と。

（7）巣父、伯夷については晋・皇甫謐撰『高士伝』参照、周黨については南朝宋・范曄撰『後漢書』逸民伝を参照。

（8）「南山」は「種豆南山下、草盛豆苗稀」（「帰田園居」五首の三）とあり、「柳暗」は「楡柳蔭後檐、桃李羅堂前」（同前）及び「五柳先生伝」にある。

（9）袁淑の伝は『宋書』巻73にある。『真隠伝』は既に散逸した。

（10）『晋書』孫綽伝（巻36）：「（綽）嘗鄙山濤、而謂人曰：『山濤吾所不解、吏非吏、隠非隠、若以禮門為龍津、則当黠額暴鱗矣。』」

（11）『論語』先進篇に「子路、曾晳、冉有、公西華侍坐。……『點、爾何如。』鼓瑟希、鏗爾、舎瑟而坐、対曰：『異乎三子者之撰。』子曰：『何傷乎、亦各言其志也。』曰：『暮春者、春服既成、冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而帰。』夫子喟然嘆曰：『吾與點也。』」と。